

『書譜』の注釈 2 : 書の本質と価値について 1

著者	廣? 裕之
雑誌名	武蔵野教育學論集
号	5
ページ	230-223
発行年	2018-09-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1419/00001047/

『書譜』の注釈 2

― 書の本質と価値について 1 ―

Annotation to *Shofu* 2:

On the Essence and Value of Calligraphy 1

廣瀬裕之*
HIROSE Hiroyuki

はじめに

本稿は、『武蔵野教育学論集』第三号所収の拙稿「『書譜』の注釈1―王羲之を典型とする四賢の優劣論について―」（二〇一七年九月刊）を承けるものであり、同書第二篇（原本の第3紙末尾3行部分【卷子本に揮毫された本文48行目の下の2字】から第9紙8行目まで）の内、第5紙までを注釈したものである。台北の故宮博物院蔵の墨書本（卷子本）を揮毫制作するために用いられた紙面ごと、つまり孫過庭自身が揮毫した紙面ごとに本稿は、章立てしている。

前号に、本文全文の意味上の区切りを記した。本稿ではその「第一篇前半」に注釈を加えたものである。

第3紙末尾

台北の故宮博物院蔵墨書本（卷子本）本文を意味的に区切り分類すると、第二篇は、48行目の下の2字から始まる。この箇所は第3紙の末尾から3行に位置する。その中でキーワードとなる語を次に記す。

《第一篇》

【ポイント1】 餘列

餘列とは、「祖先の残した『いさお』・功德」のこと、その逆に「祖先の残した不徳」の意もある熟語である。ここでは前者。

〈行数〉

48

余志

〈▼節筆のある文字とその字数〉

49 學之年。留心翰墨。味鍾張之餘

▼1

50 烈。挹義獻之前規。極慮專精。

.....

〔訓読・訳〕

①余、志學の年に、心翰墨に留む。鍾張の餘烈を味わい、義獻の前規を挹み、慮を極め專精し、

・私は、十五歳の時、書を志し、鍾張の餘烈を味わい、王羲之と王獻之の先立つ規範をくみとり、深く熟考し精進して

余〓この「余」は新字体ではない。かつて「余」は「われ」、餘は「あまり」との使い分けがあった。

志學の年〓孔子が十五歳で学問を志したことから十五歳を指すようになった。

餘烈〓〔ポイント1〕 参照

前規〓さきだつ規範

翰墨〓筆と墨・文学・書

挹〓くむ。すいあげること。

慮〓おもひかる。深く考える。すべて

第4紙

第4紙の中でキーワードとなる語を次に記す。

〔ポイント2〕 入木の術

典故とは、引用した語句などの出どころ（出典）、典故となる故事のことである。中国の昔の文中には、典故が多出する。入木の術とは王羲之が板に文字を墨で書いたとき、その墨が板の中まで深く沁み通り、削つても削つても消えなかったという故事から書道の意味を指すこととなった。

〔ポイント3〕 臨池

張芝が書を池に臨んで一生懸命学び、池の水を真つ黒にしたという故事から「臨池」も書道の意味となった。

〔ポイント4〕 懸針垂露の異

懸針とは、藤原楚水は「筆を立て、停めず針をつりさげた形」という。「平」「千」の縦面を書くときのよう針の先がとがったように筆先を抜くこと。垂露とは、懸針のようにすつと抜かずにくつくりと筆先の力を弱めて抜いて行き、収筆に丸い露のようなものができることをいう。

〔ポイント5〕 奔雷・墜石の奇

奔雷は、激しく鳴る雷の意。藤原は、ここでは「筆の運びを急速にし、筆を捻ること」とする。墜石は、石を上から落とすこと。つまり、「上から下へ筆を運ぶときに急なること。」とする。奇は、「あやしい」のほかに、「珍しい」つまり「とりわけ優れたもの」の意がある。

西林氏は、「点であるが打ち込んだ筆をひねって左へ短く、はね出す」としてている。

【ポイント6】鴻飛・獸駭の資

鴻飛とは、藤原は「高く挙り遠く引くの意」とし、「筆を遅くし、力を下に存せしむる。」としている。

飛の一面目の後半部分のように、「そり」のある画の收筆部に「はね」を付けたもの。獸駭の「駭」とは驚く・ビックリするの意、藤原は「獸の驚いて逃げ隠れる如きをいう」とする。資とは、「たから・もと・土台とする」の意。

【ポイント7】鸞舞・蛇驚の態

鸞舞について、藤原は「飛」の一面目のとき形で角を按おして遅く筆を運ぶこと」としている。「按」は「おさえる」や「おす」の意。

【ポイント8】絶岸・頽峰の勢

絶岸を藤原は、「」の如き字形。絶壁と同じく山崖の俊峭直立せるもの。」とする。頽峰を藤原は、「峯のくつれ落ちる如き貌」とする。

【ポイント9】臨危・據稿の形

臨危とは藤原は「深淵に臨むが如きをいふ」とし、據（抛の旧字体）稿の「據」を藤原は「かれき、干からびたる木のこと」とし、據稿とは「これによりかかることはすぐに碎け落ちて、非常に危険」としている。

【ポイント10】一畫の間 起伏を峯杪に變じ、一點の内。岬挫を豪芒に殊にす

この句は、書かくの画と点についてを述べたもので、藤原は「書論としても書法の実際方面からいっても、書道の上においては最も難しく、また最も肝要な点」とし、「このことさえよく理解ができ、これを実技の上に表現することさえすれば、他の書論や書法などというものは一切不必要であるといつてもよい」との見解を述べる。

杪には「こずえ・木のさき・いただき」の意があることから、峯杪は「峰のいただき」の意、つまり、起伏とは運筆時の筆の抑揚つまり上下運動であり、それが連なる山の峰々のように上下し、変化に富むさまを形容している文と考える。

岬挫の岬ぢくは、岬ぢくが正字であり「鼻血・くじける破れる・氣力が衰える」、挫は「くじく、勢力をへらす・くじけ折る」の意味がある。藤原は「岬は挫折なり、また縮むなり」という意を引く。豪は「強い・すぐれる」。芒は「のぎ・ひかり・穂先・いそがしい」の意。「殊にす」とは格別にするの意。筆を押したり、縮めたり無限に変化させることの意。

「二画のうちにも筆の抑揚によって線状を変化させ、一点の中にもくじいたり、折ったり、ちぢませたりして（変化を持たせ）すぐれた穂先（筆使）の働きで格別なものとする。」と訳せよう。

〈行数〉

51	時逾一紀。有乖入木之術。無	▼	1
52	間臨池之志。觀夫懸針垂		
53	露之異。奔雷墜石之奇。		
54	鴻飛獸駭之資。鸞舞蛇驚		
55	之態。絕岸頽峯之勢。臨危		
56	據槁之形。或重若崩雲。或		
57	輕如蟬翼。導之則泉注。頓之	▼	1
58	則山安。纖々乎似初月之出		
59	天崖。落々乎猶眾星之列河	▼	4
60	漢。同自然之妙有。非力運之		
61	能成。信可謂智巧兼優。心	▼	4
62	手雙暢。翰不虛動。下必有由。	▼	4
63	一畫之間。變起伏於峯杪。一	▼	3
64	點之內。殊岨挫於豪芒。況云	▼	3
65	積其點畫。乃成其字。曾不	▼	1
66	傍窺尺牘。俯習寸陰。引班	▼	1
67	超以爲辭。援項籍而自滿。任筆	▼	2
...	▼	2

〔訓読・訳〕

②時に「紀を逾ゆ。入木の術に乖くと有るも、臨池の志に間つて無し。

▼節筆のある文字とその字数

・時に二十四年を超え、書道の奥義にはまだ至らないが、書を学ぶ姿勢は離れたことがない。（隙がなくずっと続けている。）

二紀＝一紀は十二年間、十二支の初めに戻る年のこと。

逾＝こゆ。こえる・すぎる・いよいよ

入木の術＝〔ポイント1〕参照

臨池＝〔ポイント2〕参照

間＝へだつ。離れること

③夫の懸針垂露の異、奔雷墜石の奇、鴻飛獸駭の資、鸞舞蛇驚の態、絶岸頽峰の勢、臨危據槁の形を觀るに、或は重きこと崩雲の若く。或は輕きこと蟬翼の如し。之を導けば、則ち泉のごとく注ぐ。之を頓むれば則ち山のごとく安し。

・かの（例の）懸針・垂露の異、奔雷・墜石の奇、鴻飛・獸駭の資、鸞舞・蛇驚の態、絶岸・頽峰の勢、臨危・據槁といった点画のすぐれた形を（王羲之の書にあてはめて）觀察してみると、重きこと崩雲のようであり。或は輕妙なことは蟬翼のようであり、泉の水が注ぎ流れるように、之をしつかりとどめた山のような点画もある。

懸針・垂露の異＝〔ポイント3〕参照
 奔雷・墜石の奇＝〔ポイント4〕参照
 鴻飛・獸駭の資＝〔ポイント5〕参照
 鸞舞・蛇驚の態＝〔ポイント6〕参照
 絶岸・頽峰の勢＝〔ポイント7〕参照
 臨危・據槁の形＝〔ポイント8〕参照

④織々^{せんせん}乎^ことして初月の天崖^{てんがい}に出るに似る。落々^{らくらく}乎^ことして衆星の河漢^{かかん}に列

するが猶^{なほ}し。自然の妙有を同じうして、力運の能く成すところに非ず。
・ほそくとがつている新月が空のあなたに出現しているような姿に見え、た
くさんの星がまばらに天の河にきらめいているようでもある。このよ
うに（変化自在な）筆使いは天地を創造するのと同じで、自身の努力
で鍛錬しても達成できるものではない。

織々^{せんせん}細^こかいさま。細くとがつて鋭いさま。かぼそいさま。
乎^こ「か・かな」の意の助詞

落々^{らくらく}ものがまばらで寂しいさま。度量が大きく、細かいことにこだわらないさ
ま。

⑤信^{まこと}に智巧^{ちかう}兼ね優^{よし}れ、心手雙暢^{しやう}すと謂^いふべし。翰^{かん}虚しく動^{うご}かず。下^{した}すに
は必ず由^{よし}有り。一畫^{くわく}の間、起伏^{きふ}を峯杪^{ほうせう}に變^へじ、一點^{いちでん}の内、峴^{けん}控^{くわう}を豪^{かう}芒^{ぼう}
に殊^{こと}にす。

・まことに見識、技巧ともに抜群で、心境、手腕ともに暢達していると
いえよう。筆がままな運筆にならず、筆を紙面に下すにも必然性を
持ち、一画のうちにも筆の抑揚によって線状を変化させ、一点の中
にも、くじいたり、折ったり、ちぢませたりして（変化を持たせ）すぐ
れた穂先（筆使い）の働きで格別なものとする。

翰^{かん}はね（羽）。筆のこと。古代では鳥の羽でも筆を作ったことによる。
一畫の間、起伏を峯杪に變じ、一點の内、峴控を豪芒に殊にす（●ポイント10）
参照

⑥況^{いは}んや云^{こと}に其の點畫^{てんが}を積^たみ、乃^{すなは}ち其の字^じを成^{なり}し、曾^{すなは}ち傍^{はう}ねく尺^{せき}櫝^{ぼく}を
窺^{うかが}ひ、俯^ふして習^{しゆ}ふこと寸陰^{すんいん}もせず。班超^{はんしやう}を引^ひて以^{もつ}て辞^じと爲^なし、項籍^{きやうせき}
を援^{えん}いて、而^{しか}して自ら滿^{まん}とし、筆に任^{まか}せて【體^{たい}を爲^なす。】

・ましてやここで点や画を積み重ねてそれで字ができたとし、それこそ、
むかしのよい手紙などの筆跡を見て学習するようなことは少しもせ
ず、班超の故事を引用して（不勉強の）言い訳し、項籍の故事を引き
て自ら満足し、筆に任せて【取り繕っている。】

寸陰^{すんいん}少^{すく}し

班超^{はんしやう}『後漢書』班超伝。後漢の人。家貧しく、筆耕して母を養う。

項籍^{きやうせき}『史記』項羽伝中に名が見られる。秦末の人。少年のころに書を学んだがも
のにならなかった。劍を学んだがこれもものにならず。項梁は叱った。項籍
は「書は姓名を記すに足る。劍は一人の敵のみ。学ぶに足らず。万人の敵を
学ばん」と答えたという。

第5紙

●ポイント11「君子の身を立つるや、務めて其の本を修む。」

この文章は、『論語』学而篇第一「君子はその本を務む。本立ち道生
ず。孝弟なるものはそれ仁の本爲るか」君子はものの根本に力を注ぐも
のだ。根本がしっかりとしていれば、道は開けるが孝と悌は人の最高道徳
である仁という徳の根本といつてよいであろうか。を出典とする。「孝」

は子としてすなおな態度で親に接すること。「悌」は兄長に対して従順に接すること。

【ポイント12】楊雄

楊雄の著『楊子法言』によると、少年のころに好んで文学や篆刻を作ったが、壮年以後は、それを後悔して作らなかつたという。孫過庭がこれを引用するのは一見矛盾しているが、次に賞賛するための論法である。

【ポイント13】小道

小道とは、「こみち」のほかに「些細な仕事・小さい道義」の意がある。大道に対する語。西林氏は「枝葉末節のこと」と訳し、古邨は「小道末技・末技小技」と訳す。『論語』子張篇に「子夏曰く、小道と雖も必ず観るべきものあらん。速きを致すには恐らく泥まん。是を以て君子は為ざるなり。」一芸一能の小さな道にも必ず道理をそなえ、みるべきものがあるが、遠大な君子の道を極めようとするにはおそらくこれに拘泥して邪魔されることであろう。ゆえに君子は大道に心を用いて小芸を学ばないのである。

【ポイント14】行蔵

進んで道を行うのと退き隠れて才能を表さないことから出処進退のことをいう。出典は『論語』述而篇による。「子謂「顔淵曰、用之則行、舍之則蔵。唯吾与爾有是夫」自分認めて用いてくれるものがあれば出でて我道を行い、世の中から見捨てられた場合は、抱負を心の中にひそめ

てじつとかくれる。出処進退の宜しきを得るのは我とお前ぐらいのものかなあ。

【ポイント15】義理の會歸

義は正しいすじ道、会歸はあつまりおもむくところの意である。つまり、学問等異つた事柄が結果として一つにまとまることをさす。

〈行数〉

【】は見せ消ち

△節筆のある文字とその字数

68 爲體。聚墨成形。心昏擬【効】效之

▼3

69 方。手迷【輕重之】揮運之理。求

70 其妍妙。不亦謬哉。然君子立

71 身。務修其本。揚雄謂。「詩賦

72 小道。壯夫不爲。」況復溺思豪

73 釐。淪精翰墨者也。夫潛神對弈。

74 猶標坐隱之名。樂志垂綸。尚

75 體行蔵之趣。詎若功定禮

76 樂。妙擬神仙。猶埏埴之罔窮。

77 與工鑪而並運。好異尚奇之

78 士。翫體勢之多方。窮微測妙

79 之夫。得推移之奧蹟。著述

80 者假其糟粕。藻鑒者挹其

▼1

▼1

▼1

▼3

81 菁華。固義理之會歸。信

82 賢達之兼善者矣。存精寓

83 賞。豈徒然歟。【然消息多方形】

.....

【訓読・訳】

⑦墨を聚めて形を成し、心は擬效の方に昏く、手は揮運の理に迷ひて、其の妍妙ならんことを求むも亦た謬らずや。

・墨を塗りたくり、こころは、(古典を) 模倣する(臨書する) ことに暗く、手は、用筆の理に従うこともできない。そんなことでよい字を書こうとしても大間違いである。

聚めて＝大勢あつめる。
擬效＝擬は似ること、效は効、模倣しうることである。

⑧然れども君子の身を立つるや、務めて其の本を修む。楊雄謂ふ。「詩賦は小道なり。壯夫は為らず」と。況や復た思を豪釐に溺らし、精翰墨に淪むる者や。

・けれども、徳のある君子が、己の身を立てるのにはその根本となるべき修養に努力する必要がある。楊雄の言葉を借りれば、詩を作るようなことは、小道小技であり、勇しい男(大人物)の行うことではない。まして、筆の先に気持ちを沈溺し、書道のような小道に精力を使い果

たすというのはいかななものかと思う。

楊雄＝【●ポイント12】参照
豪釐＝きわめて小さなこと。筆先の小さなこと。

⑨夫れ神を潜めて突に對するも、猶ほ坐隱の名を標す。志を樂しみ綸を垂るるも、尚ほ行藏の趣を體す。詎ぞ功は禮樂を宣べ、妙、神仙に擬すること猶ほ埏埴の窮り罔きがごとく、工鏞と並び運るがごときにも若かんや。

・精神をひそめて(心を没頭して) 囲碁を対局するようななら、「王坦之のように」坐隱(座っている隠者) という名声を手に入れている。志を樂しみ、糸を垂れて釣りをするようななら、「太公望呂公のように」進んで道を行うのと、退き隠れて才能を表さない面がある(つまり出処進退の理を体得しているといわれる)。どうして書道の効用は礼樂を宣揚する(広く天下に表わす) ものでもあるし、その妙は神仙のように似ているのであろう。柔らかな粘土をこねて輶輶で回し、器を作るようなものである。

突＝碁を打つ。重なる・ついで・おおきい

綸＝いと。綸言(天子の詔)

行藏＝【●ポイント14】参照

埏埴＝埏は、ねやす・土をこねてのびやすくする意。埴は、「はに」粘土の意。
「埏埴」で陶器をつくるために土をこねること「老子」となる。

⑩異を好み奇を尚ぶの士は、體勢の多方を翫び、微を窮め妙を測るの夫は、推移の奥蹟を得るとし、著述する者は、其の糟粕を假り、藻鑿ある者は其の菁華を挹む。固ち義理の會歸は、信に賢達の兼善なる者なり。精を存し賞を寓するも。豈に徒然ならんや。

・風変わりで人と異なったことを貴ぶ人は、多面的な変化を面白く思うが、ほのかな美を極め妙趣を求める人は、移り行く呼吸の深遠さを得ようとする。言葉で評論著述するものは、自身で体験していないことを他人の粕（とるにたりない言葉）をかりて言う。鑑識眼のある人は、その真髓を汲む。すなわち、義と理の一致は、達人にして備わるものである。（つねに名品というものを）精神（心）を傾けて鑑賞しているのは、決して理由のないことではない。

翫もてあそぶ・手の中どころがす。「習士元」元は丸（まるい）まるく角がとれる。

奥蹟＝奥は、おく深く容易に解せられない事柄、蹟はおくぶかいまたそのような道理の意。「匠」は臣ではなく「あこ」の形であり、「責」は「積」でぎざと積み重なるの意。ここから「蹟」は、あこの中のようにいくえにも入りこんで深いことの意となった。

糟粕＝酒をしぼった残りのかす。あとに残ったつまらないものたといえ。

藻鑿＝藻には水中にはえる「も」のほかに「あやがあつてきらびやかなさま・文章で修辭が巧みなさま・ことばのあや」などの意がある。藻鑑とも書き、人物や品物を見わけるすぐれた目があることをさす。

菁華＝その物事を中心になるすぐれた部分をさす。

徒然＝何もすることがなくなつていくつなさ・何もしないでじつとしているさま

・漫然・理由のないこと・むなしい・うそ・そればかりなどの意がある。
ここでは「理由のないこと」の意。ちなみに「つれづれ」と読むとつくづく物思いにふけることとなる。

まとめ

第一篇は比較的長文なのでここではその前半の注釈を試みた。①と②は孫過庭自身の研究の過程を略述し、鍾張義獻の流れをくむ正統なものであると述べている。③から⑤は各ポイント欄で詳しく述べた。⑥について古邨は「ここでは書を末技小技として軽視し、大人物たる者の為すべきことではない」とし、詩賦でさえ小技で「況んや書をやという論法である。」と述べ「孫過庭のやうな書家がかく言ふのは矛盾も甚だしい。しかしこの論法は次の論を起すための方便である。漢文にはこの論法が非常に多い。」とする。

参考文献

- ・藤原楚水『註解名蹟碑帖大成』下巻 1977・1 省心書房
- ・藤原楚水『訳註書譜・続書譜の研究』1973・12 省心書房
- ・中田勇次郎編『中国書論大系』第一巻 唐 I 1977・12 二玄社
- ・西林昭一訳『書譜』 右書に所収（九三頁〜一七七頁）
- ・田邊古邨『田邊古邨全集』 第一巻 平成28年2月 芸術新聞社
- ・田邊古邨訳『書譜』 右書に所収（一四五頁〜三三八頁）
- ・新釈漢文大系第一巻『論語』 平成3年5月 明治書院